

国はもう面倒見ない

東独時代の栄光に組織的ドーピングが大きな影を落とす一方で、高度な科学的、実証的手法によって築かれた選手育成システムもメダル量産の一翼を担っていた。だが1990年の東西ドイツ統一後、社会主義体制の崩壊により、国威発揚の手段としてのスポーツ特化政策は不可能となる。



ドイツ 下



緑に囲まれたキーンバウムのトレーニングセンター。東独時代はメダル量産の強化拠点となった一写真は、いずれも千葉直樹撮影

旧西ベルリンでコーチをしていたユルゲン・マロウ氏(現ドイツ陸連強化担当)は「旧東ベルリンでは約100万の住人に対して、公務員としてのコーチが100人もいた。コストを度外視したもので今では不可能な」と話す。能力に秀でて選抜された子供たちが、生活を共にしながら一日中、勉強とトレーニングに励む学校「スポーツシューレ」。理学療法

士やスポーツ医学を専門とした医師らによる学問的な研究。ベルリン近郊のキーンバウムに建設された東独のトレーニングセンターには、長距離の練習用に標高4000級の状態を減圧で作り出せる施設まであった。東独出身の元マラソン選手で日本の大会でも優勝経験のあるカトリン・ドレーさんは、「優勝しなければ2位でも3位でもダメ人間扱い。トップ選手になって何とかして外国に行きたい」という大きな動機付け



カトリン・ドレー

東独消え 育成制度崩壊



「強い走り幅跳び選手が出てくることを期待している」と話すハイケ・ドレクスラーさん(ドイツ・カールスルーエ)

があった」と振り返る。東西を隔てた壁の崩壊とともに環境は一変した。国家の統制の下、良くも悪くもスポーツに集中していた選手たちは、自由と引き換えに、資本主義社会の洗礼を受けた。「私たちにとっては学習の時期だった。年金、保険、住居、自分で考えなくてはいけないことが山のようにあった」とドレーさん。1980年代から統一の前後をまたいで二十数年間も女子短距離、走り幅跳びで世界に君臨したハ

イク・ドレクスラーさんも「東独は国が面倒を見てくれたが、統一後は個人がすべてに責任を負わなくてはならない。スポーツを続けるための後ろ盾が必要だった」と、保険会社に就職して現役を続けた。だがこうしたトップ選手の何倍もの数の選手がスポーツ以外のことに時間を取られ、将来への不安から引退を選んだ。

統一後のドイツ陸上界は、東独時代のすべての構造を壊すことから始まった。統一後のドイツ陸上界は、東独時代のすべての構造を壊すことから始まった。統一後のドイツ陸上界は、東独時代のすべての構造を壊すことから始まった。

◆メダル数の推移 1968年から単独で五輪参加した東独は、西側諸国がボイコットした80年モスクワ大会で金41個を含む126個のメダルを獲得するなど、72年から88年までの間、不参加だった84年ロサンゼルス大会を除き、夏冬大会と世界3位以内を維持。東西統一後の夏季4大会でのドイツの総メダル数は82個、65個、57個、48個と減少している。(メダル数は大会終了時)

た。ドーピングの反省は当然だが、体制の変化にかかわらず継承されるべきだった高度なトレーニング理論や研究知識も否定された。アフリカや中国など新興勢力の台頭もあって、世界での地盤沈下は進んだ。もし東独時代の「正の遺産」が残っていれば信じられないほど強い国ができていたであろう。

大阪の世界陸上から北京五輪をへさんで、ドイツは2009年にはベルリンで世界選手権を開催する。往時の面目を保つ投てき種目を中心にメダルの期待がかかるが、陸上王国の復活に向けての模索は続く。